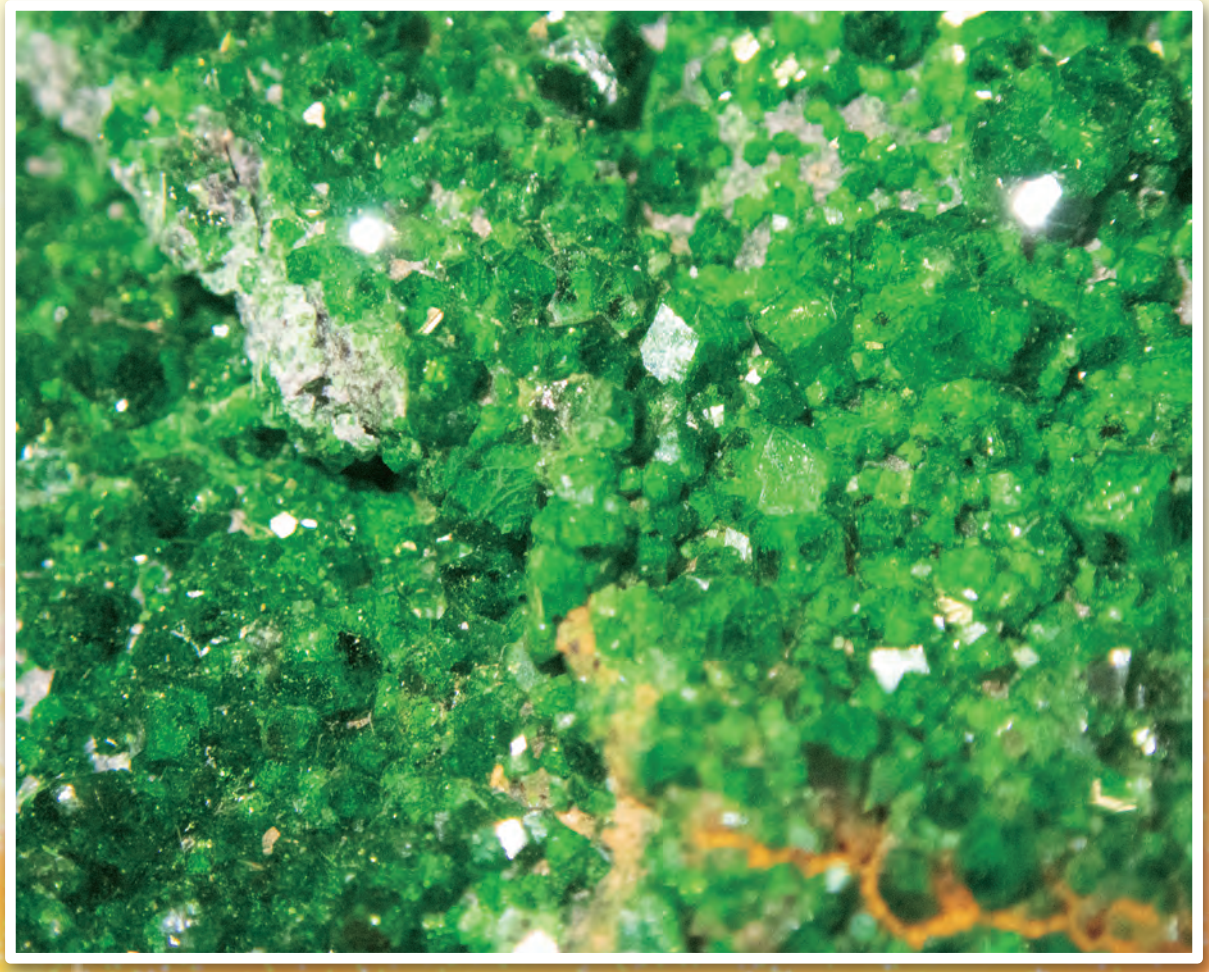
Museum News
博物館ニュース
徳島県立博物館
No.125
2021年12月3日発行



灰クロムざくろ石（別名：ウバロバイト）

緑にかがやくざくろ石

灰クロムざくろ石は、クロムとカルシウムを含むざくろ石です。ロシアのウラル地方から産出する濃緑色の12面体の結晶（写真）は、光沢が強く、たいへんみごとです。

県内にも、この鉱物の産地があります。勝浦町辻谷地区の蛇紋岩分布域には、クロム苦土鉱を主体とする鉱石があり、小規模に採掘された跡が残されています。この鉱石の中に、灰クロムざくろ石と思われる緑色の鉱物がありましたが、結晶はあまりにも小さく、肉眼では皮膜状にしか見えませんでした。

ウラル産の灰クロムざくろ石は常設展示室の「自然史コレクション」で展示中です。ぜひご覧ください。

（中尾賢一）

絵師・矢野伊章栄光について

大橋俊雄

はじめに

矢野伊章栄光（以下、伊章と表記します）は、江戸時代の19世紀前半に活躍した徳島の絵師です。江戸に出て狩野派の画法を学び、現在の徳島市富田橋のあたりに住んだといわれますが、当時の絵師の例にもれず、いまの人びとにはなじみが薄いようです。歴史の彼方に埋もれた伊章という人物に光をあててみたいと思います。

1．経歴

矢野家は、代々徳島藩に仕える藩士でした。そのため、家の由来と系図をまとめた「成立書并系図共」を藩に提出しています。同書により、伊章の経歴をある程度知ることができます。

矢野家はもともと藩の料理方ですが、祖父の代から絵の御用をつとめています。そして父栄教は、10代藩主蜂須賀重喜に推されて江戸に出て、狩野栄川典信に弟子入りします。典信は幕府に仕える絵師ですが、奥絵師と呼ばれ、旗本に匹敵する身分をもっていました。そして江戸木挽町に広大な屋敷地を拝領し、一統が木挽町狩野家と呼ばれて栄えてゆきます。父栄教は、当時もっとも勢力のある絵師に入門したことになります。そして明和４年（1767）に藩の御絵師に就きます。

伊章は栄教の四男でした。しかし長兄の伊籍が病弱であったため、伊籍の養子となって栄教の役を引き継ぎます。彼は文化６年（1809）に典信の孫伊川栄信に弟子入りします。そして同９年に御絵師に就きます。ただし木挽町狩野家での修業はつづけ、同14年にようやく帰国しています。文政元年（1818）には藩の川船の杉戸絵を描き、ときには屏風絵を命じられることもありました。天保６年（1835）には、嫡子の章三郎を栄信の子晴川院養信に弟子入りさせます。しかし章三郎は３年後に退身し、絵師の役目は伊章の代が最後となります。亡くなったのは同11年です。

2．絵画作品

伊章の作品は、さがせばあると思いますが、いまのところ柿本人麻呂図（写真１）が知られるのみです。

この作品は、飛鳥時代の歌人である柿本人麻呂を、絹地に着色で表しています。人麻呂は、のちに三十六歌仙のひとりとされ、住吉明神、玉津島明神とあわせて和歌三神といわれるなど、

写真１　柿本人麻呂図　矢野伊章筆　徳島県立博物館蔵

歌の世界ではあつく敬われていました。そのためしばしば絵に描かれています。伊章の作品もそのひとつであり、老いて気品ある人麻呂の姿がとらえられています。写真1の右下には、「伊章藤原栄光」の落款と「伊章」の朱文方印があります。寸法は縦90.0ｃｍ、横37.5ｃｍです。

3．中国画の模写

伊章が学んだ木挽町狩野家では、日本の古い絵巻や、中国から渡ってきた絵画などをさかんに写しとり、模本を蓄積しています。現在、それらの大半は東京国立博物館に保管されています。模本の作成には当主だけでなく門人も参加しており、伊章はそうした模本作者のひとりでした。

ここでは、伊章が写したものの、師家に納められず、彼の手もとに残された中国画の模本をとりあげます。いずれも当館の所蔵品です。

王人佐筆白梅図模本（写真２）は、紙の隅に「文政十一戊子春二月下浣栄光写焉」の銘があり、文政11年（1828）の２月下旬に伊章が写したことがわかります。そして王人佐の字や号、画面の材質と寸法、表装裂について記した銘がつづきます。伊章は文政11年には徳島にいましたので、原本の白梅図は、あるいは藩主である蜂須賀家の所蔵品だったのかもしれません。なお王人佐の紅梅図の方は、竹内養甫が写しており、模本がいまも東京国立博物館にあります。

白梅図模本のような、伊章が写したことが確かな模本はほかにもあります。それらを手がかりにすると、伊章の名がなくても、彼が写したのではないかと推測できる模本がみつかります。

呉令筆帰荘図模本（写真３）は、明の崇禎17年（1644）に呉令が描いた作品を写しています。画題は、陶淵明（365～427）が作った「帰去来辞」によっています。銘はありませんが、原本にある「崇禎甲申十二月廿五日呉令写」の款記が、伊章の筆跡で写しとられていますので、伊章が作成した模本ではないかと思われます。模本とはいいながら、風になびく柳の枝が印象的です。

なお、呉令筆帰荘図の原本は当時人気があったようです。関東の南画家として有名な谷文晁（1763～1840）が、ほとんどおなじ図様をつかい、細部をわずかに変えただけの帰去来図を描いていることが知られています。

（美術工芸担当）

写真２　王人佐筆白梅図模本（左）とその銘の一部（右）
矢野伊章模　　徳島県立博物館蔵

写真３　呉令筆帰荘図模本　徳島県立博物館蔵

自然史コレクション

常設展示室の「自然史コレクション」では、鉱物標本とともに、ふだん展示していない自然史分野の資料を、テーマを決めて展示します。展示スペースの1/3では鉱物を常時展示し、残りの2/3のスペースでテーマを変えながら展示していきます。

令和４（2022）年２月中旬までは、「ミニ鉱物展」として、色や形がとくにみごとな館蔵の鉱物標本を展示しています。この展示では、きれいな標本をできるだけよい状態で見ることができるように配列しました。そのため、同じ種類の鉱物でも、別な産地であれば離れた場所に置かれていることもあります（たとえば菱マンガン鉱など）。同じ種類の鉱物でも産地により色や形が異なることも多いので、産地ごとに比較するのもおすすめです。

図１　自然史コレクション概観

図２　菱マンガン鉱　アメリカ・ミズーリ州、スイートホーム鉱山。菱形６面体の結晶

図４　緑柱石（アクアマリン）　パキスタン、ギルギット。６角柱状の結晶。周囲の茶色い鉱物は白雲母

図３　菱マンガン鉱　青森県西目屋村、尾太鉱山。ぶどう状の結晶集合体

図５　石膏　オーストラリア、南オーストラリア州ワイアラ。砂漠地帯の塩湖が干上がって形成されたもの

コロナ禍と民俗・暮らしぶりの変化

新型コロナウイルス感染症の流行にともない、私たちの暮らしは変化を強いられてきました。周知のことですが、中国武漢での大流行を皮切りに、2019年末以来世界中に拡大していったこのパンデミックは、2021年秋現在でも収束を見通すことができません。

新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の提言（2020年５月）を受けて、厚生労働省は「新しい生活様式」の実践例を公表しました。感染症対策を目的とし、国が私たちの暮らしぶりの変更を、具体的に、そして事細かに推奨するといった異例のものでした。当館も、2020年４月22日から５月８日の間、臨時休館したほか、公益財団法人日本博物館協会が示した「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」にもとづき、各種感染症拡大防止対策を講じてきました。展示室では、受付カウンターへのアクリル板、展示室入口への非接触型検温器、消毒用アルコール等の設置、職員等のマスク着用、手指消毒の徹底等の対策を行い、来館された方にもマスク着用、手指消毒、検温、入場制限、連絡先の記入、ソーシャルディスタンシングの徹底等をお願いしています（写真１）。

このコロナ禍で、私たちの暮らしぶりそのものである民俗もまた、大きな影響を受けています。各地から祭礼や民俗芸能の中止・簡略化の話が聞こえて来ますし（写真２・３）、学校や子どもたちの活動を通じた伝承活動も難しさを増しています。帰省や遠方の墓参といった習慣の自粛、冠婚葬祭や年中行事、地区での共同作業の中止・縮小等影響は多岐に及びます。

写真１　感染症対策をした博物館常設展入口付近（2021年10月）

写真２　「密」を避けるため、ほとんどの海女・海士らが参加を自粛した素潜り潜水漁の安全祈願祭（美波町阿部、2020年６月）

写真３　秋祭りで神輿を出さない旨を伝える地区の掲示板（徳島市八万町、2021年10月）

学芸業務に関連する事例もあります。博物館の行事として、ある地区の秋祭り見学を計画していました。神事を中心とする祭り自体は行われたのですが、屋台や神輿は出ず、踊りは行われないとのこと、また、大勢でおじゃますることも遠慮した方がよい状況であったことから、行事としては中止にせざるを得ませんでした。山間地のあるお宅に招かれて資料調査に行った際には、他地域からの来訪者ということで随分と気を遣った対応をする必要がありました。海辺の地域の漁師さんから聞き取りをした際、普段高値の海産物の値が下がり、売れないのだと教えてもらいました。各地の冠婚葬祭や宴会の中止・縮小、飲食店の営業自粛の影響が生産の現場まで広がっているわけです。

１つ１つの事例を、少しずつでも記録化していく必要を感じています。こうした取り組みを始めている各分野の学会、博物館等があると聞き及んでいます。このコロナ禍が過去のものになったとき、そうした記録が重要なものになってくるかもしれません。

（民俗担当：磯本宏紀）

ここに遺跡があります

―トンネル内に描かれた絵と板野町の弥生遺跡―

板野町田園パーク横を南北に走る県道122号線には、高架下を通過するトンネル部分があります。トンネルの壁や天井には、脱穀をする人、建物、カメ・シカなどの絵が描かれています（図1）。その一部は銅鐸に描かれた絵を模倣しており、弥生時代の様子を描いているようです。今回は、トンネル周辺にある二つの弥生遺跡と、トンネル内の絵や、その絵に関連があるオブジェについて紹介します。

図1　弥生時代を彷彿とさせる絵が描かれたトンネル内

黒谷川宮ノ前遺跡

黒谷川宮ノ前遺跡はトンネルの北西数百mの場所にあり、発掘調査で弥生時代の水田やアゼ、イネ株の痕跡、鋤跡、人の足跡が発見されました。弥生土器、打製石庖丁やイネ属の植物珪酸体なども出土しており、弥生時代の稲作について具体的な様子を思い浮かべることができる遺跡です。トンネル内には杵と臼を使って脱穀作業をする人が描かれ、またトンネルの南側には、巨大な石庖丁のオブジェが置かれています（図2）。絵やオブジェは、弥生時代にこの辺りで稲作をしていたことを表現しているのでしょう。

図2　巨大な石庖丁のオブジェ

黒谷川郡頭遺跡

黒谷川郡頭遺跡は、トンネル東側に展開する弥生時代の集落遺跡です。トンネル北側を東に向かって流れる黒谷川の川底から、発掘調査によっておよそ30棟の竪穴建物が発見されました。鉄鍛冶遺構や水銀朱の精製に用いた弥生土器や石器が確認されたほか、蛇紋岩製勾玉が出土しました。これにより黒谷川郡頭遺跡は、鉄や朱・勾玉といった重要品の生産や流通に関わる、県内で最も重要な弥生遺跡の一つとして評価されています。遺跡の存在を示すためか、トンネル内には集落を表すように複数の建物の絵が描かれ、黒谷川に架かる黒谷川大橋の欄干には勾玉のオブジェ（図3）が置かれています。

図3　橋の欄干に置かれた巨大勾玉のオブジェ

紹介した遺跡は、現在の地面より3m以上深い場所にあり、板野町内を歩いても弥生遺跡の存在を感じることはありません（図4）。トンネルの絵やオブジェは、弥生時代の遺跡が近くにあることを、私たちに教えてくれる目印なのです。

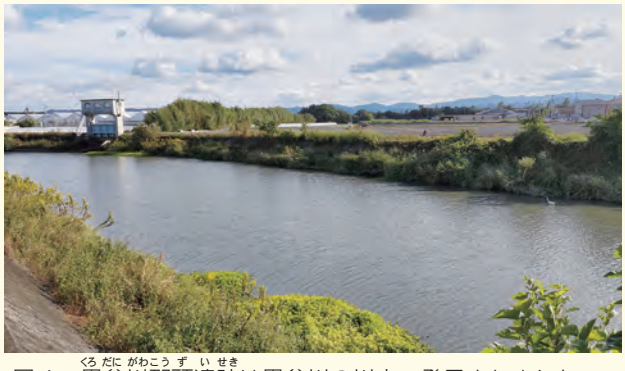


図4　黒谷川郡頭遺跡は黒谷川の川底で発見されました

（考古担当：植地岳彦）

レファレンス Q and A

四国遍路（へんろ）は どうして「遍路」というのですか？

四国遍路は、弘法大師空海ゆかりとされる霊場（札所）八十八か所をたどり、四国を一周する巡礼です。「遍路」という表現は、四国八十八か所の巡礼、あるいはそれを模したものを意味するだけで、他の巡礼を遍路ということはありません。

四国遍路に見られるような、四国を一周巡るという宗教的な活動は、平安時代末期に遡ります。『梁塵秘抄』や『今昔物語集』に、「四国辺地」といわれる修行が描かれており、修行僧が海水でずぶ濡れになりながら四国の海岸を巡る過酷な様子が知られます。また、鎌倉時代から戦国時代にかけて、山伏が西国巡礼（おおむね近畿地方に散在する観音霊場三十三か所を訪ねる巡礼）とともに行った修行として「四国辺路」があり、やはり海岸を巡るものだったようです。このことから、辺地が辺路と表現されるようになったとみられます。

この四国辺路が、海岸巡りから霊場巡りになっていくとともに、宗教者以外の人びとも四国を巡るようになるなどの変化を経て、江戸時代に至って現在のような八十八か所の巡礼になったと考えられています。そして、辺路をいつしか（おそらく戦国時代に）「へんろ」というようになりました。

こうした経緯があったため、江戸時代には「へんろ」を「辺路」と記す例が多いですが、「遍路」という表現も現れてきました。案内書や地図などでは「徧礼」とされました。「徧」と「遍」は同じ意味で、「行き渡る」ということです。四国あるいは多数の霊場をくまなく巡ることによるのでしょう。

このように「遍路」は「辺路」に由来しており、長い歴史が反映されています。

（歴史担当：長谷川賢二）

図１　廻（まわ）り手形
明暦（めいれき）４年（1658）　個人蔵（当館保管）
徳島城下にあった持明院（じみょういん）が発給した往来手形。「辺路」と「遍路」が併用されている。

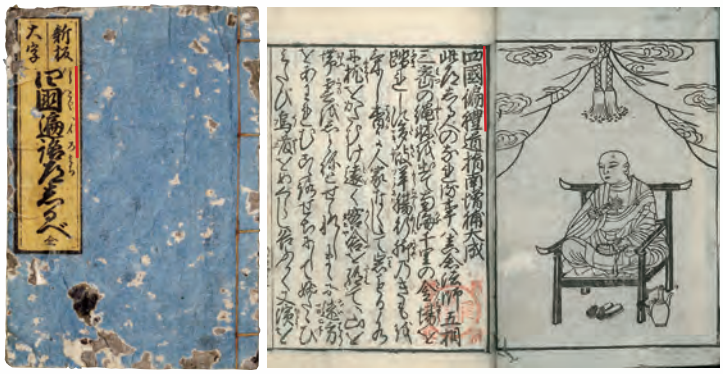


図２　新板大字四国遍路道しるべ
文化（ぶんか）12年（1815）　当館蔵
四国遍路の案内書で、内題は「四国徧礼道指南増補大成」とある。「遍路」と「徧礼」の併用が分かる。

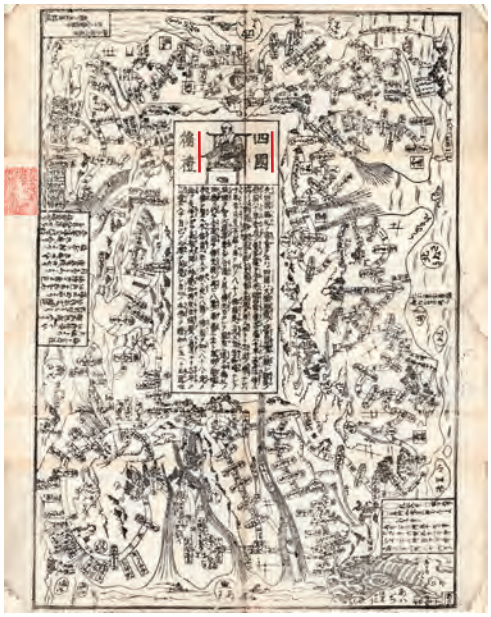


図３　四国徧礼絵図
江戸時代　当館蔵
四国遍路の簡略な絵図。弘法大師像とともに「四国徧礼」という記載がある。

１月から３月までの博物館普及行事　あなたも参加してみませんか？

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	申込	対象（定員）	備考
野外生きものかんさつ	初めての植物かんさつ（新春編）★	1月30日(日)	13:30～15:30	要	小学生から一般(15)	同日開催「ゼロから始める植物学」
	中級クラス植物観察会２月	2月13日(日)	10:00～17:00	要	小学生から一般(10)	県内・現地集合 長袖・長ズボンなど 弁当・水筒持参
たのしい地学体験教室	木の葉化石の発掘体験★	2月27日(日)	13:30～15:00	要	小学生から一般(15)	材料費100円 (高校生以下は不要)
	貝化石標本をつくろう	3月13日(日)	13:30～15:00	要	小学生から一般(20)	小学3年から一般 (小学生は保護者同伴)
歴史散歩	前山古墳群・曽我氏神社古墳群を見学しよう	2月13日(日)	13:00～17:00	要	小学生から一般(15)	名西郡石井町・現地集合 (小学生は保護者同伴)
ミュージアムトーク	あなたの知らないカメムシの話	1月23日(日)	13:30～15:00	要	小学生から一般(20)	小学3年から一般 (小学生は保護者同伴)
	ゼロから始める植物学～標本整理編～	1月30日(日)	10:30～12:00	要	小学生から一般(20)	小学生は保護者同伴 同日開催「初めての植物かんさつ（新春編）」
	武士の四国遍路一遍路日記から一	3月21日(月・祝)	13:30～15:00	要	小学生から一般(20)	小学3年から一般 (小学生は保護者同伴)

◎★印は「チャレンジ自由研究」対応行事です。　◎小学生が参加する場合は保護者同伴です。　◎全ての行事が「文化の森教室」に該当します。

普及行事のお申し込みについて

◎1枚の往復はがきで、1行事のみ申し込むことができます。
◎行事日の1か月前から10日前までに必着でお申し込みください。
◎返信用はがきには、住所・氏名を記入してください。
◎希望者が多数の場合は抽選とし、詳細は当選された方にお知らせします。
◎原則として、参加費は無料です。
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、参加人数や申し込み方法を変更する場合があります。詳しくは、徳島県立博物館のホームページをご覧いただくか、お電話でご確認ください。
※お問い合わせは、徳島県立博物館まで（電話 088-668-3636 FAX 088-668-7197）

往復はがきの記入例

<往信の表面>	<返信の裏面>	<返信の表面>	<往信の裏面>
63 〒770-8070 往信 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館	何も書かないでください	63 〒□□□-□□□□ 返信 あなたの郵便番号 住所 氏名	1.参加希望の行事名 2.参加希望者全員名（学年・年齢） 3.住所 4.電話番号（またはFAX番号）

学校教育に博物館を！

徳島県立博物館のもつ資源（もの・情報・人）を、学校教育の場で有効に活用していただきたいと考えています。

- 遠足
- 館内授業（博物館で）
- 出前授業（学校で）
- 博物館資料の貸し出し
- 教材研究のお手伝い

火おこし（出前授業・館内授業）

- 学習内容に関する質問や実験・観察の方法など、何でもお気軽におたずねください。動物、植物、地学、考古、歴史、民俗、美術工芸の各分野の学芸員がご相談に応じます。お気軽にお電話ください。

※お問い合わせは、徳島県立博物館まで（電話088-668-3636）

特典がいっぱい！！ 徳島県立博物館友の会

博物館友の会は、年間を通してさまざまな体験活動を行い、自然や歴史・文化について理解を深めながら、楽しく学んでいます。

個人でも、ご家族でもご入会いただけます。みなさんも参加してみませんか

■**年会費**　・個人会員2,000円　・家族会員3,000円
（10月以降にご入会される場合、会費はそれぞれ半額となります。）

■**会員の特典**
- 友の会行事に参加できます。
- 友の会の出版物やミュージアムショップの商品を、１割引で購入することができます。
- 催し物案内や博物館ニュース、会報などが毎月お手元に届きます。

※行事名・期日・場所は変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

化石をさがそう！

詳しくは、友の会事務局まで（電話088-668-3636）

上記お問い合わせは、徳島県立博物館まで（電話 088-668-3636　FAX 088-668-7197）

■発行年月日　2021年12月３日
■編集・発行　徳島県立博物館　〒770-8070　徳島市八万町向寺山
https://museum.bunmori.tokushima.jp　TEL088-668-3636　FAX088-668-7197